

# 1-3-11 M系列変調相関法による残響時間の測定\*

——理論的考察——

嵯峨山茂樹 (日本電信電話公社武蔵野電気通信研究所)  
五十嵐寿一 石井泰 (東京大学宇宙航空研究所)

**1** はじめに 次のような特徴を持つ、新しい残響時間測定法を提案する。

- (1) 雑音存在下でも測定可能である。
- (2) Schroederの方法<sup>1)</sup>によって多数回測定し、平均したものに等価である。
- (3) 測定機器は高性能を要しない。(Dレンジ, 歪, 残留雑音 etc)

**2** 測定方法 Fig.1に図解する。

M系列信号 (clock に同期して、不規則に  $\pm 1$  をとる)  $m(t)$  により白色雑音を断続し、所望の帯域のフィルタに通してスピーカへ送る。測定点のマイク出力  $y(t)$  を二乗検波して  $y^2(t)$  とし、一方、M系列信号を積分器 (CR回路で代用) に通したものを  $\bar{m}(t)$  とする。両者の相互相関関数  $\phi_{\bar{m}y^2}(\tau)$  を、実時間相関器 (or ミニコン) で計算すれば、これは、残響減衰曲線となっている。log をとれば、勾配から残響時間が知られる。

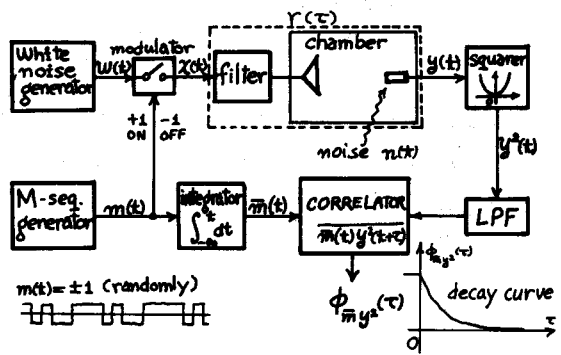


Fig. 1. Block Diagram of Measuring System.

**3** 原理 フィルタ, スピーカ, chamber, マイク等を結合した系のインパルス応答を  $r(\tau)$  とすれば、この系の、インパルスのパワ注入に対する応答 (ie. echo time pattern) は  $r^2(\tau)$  である。これは、通常のM系列変調相関法<sup>2,3)</sup>により、(近似的に) 求められる (Fig.2 (a),(b))。残響曲線は、 $r^2(\tau) = \phi_{mm}(\tau)$  を、 $\tau$  軸と逆の向きに積分してゆけば得られる<sup>4)</sup> が、これは、相関関数の第1添字の関数を積分することに等しい。つまり、 $\bar{m}(t) = \int_{-\infty}^t m(\lambda) d\lambda$  とすると、 $\phi_{\bar{m}y^2}(\tau)$  が、求める decay curve である。測定の、時間分解能は、Fig.2 (a) の、三角形の急峻さで決まる。つまり、M系列のクロック周期によって決まる。

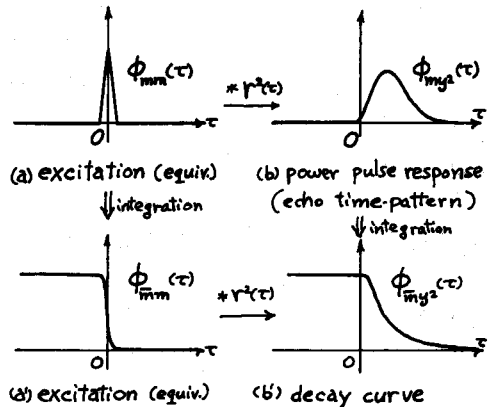


Fig. 2. Illustration of the Theory.

\* Measurement of Reverberation Time by Correlation Method Using M-sequence Modulation — Theoretical Consideration — by S.SAGAYAMA (Musashino ECL, NTT), J.IGARASHI, & Y.ISHII (ISAS, Univ. of Tokyo).

4 理論的解析 ③の定性的説明とは別に、数式により解析しておく。但し、 $\xi(t)$ の平均を  $\bar{\xi}(t) \triangleq \lim_{T \rightarrow \infty} \frac{1}{T} \int_0^T \xi(t) dt$ ,  $\xi(t)$ と $\eta(t)$ の相関関数を  $\phi_{\xi\eta}(\tau) \triangleq \bar{\xi}(t)\eta(t+\tau)$ と書く。また、 $n(t)$ は、 $m(t), w(t)$ と独立な雑音(測定時混入アンプ発生ノイズ等)である。

$$\begin{cases} \text{系 } r(\tau) \text{ の入力は, } & x(t) = \frac{1}{2} \{m(t)+1\} w(t) \quad (\text{断続された白色雑音}) \quad (1) \\ \text{従って, 出力は, } & y(t) = x(t) * r(t) + n(t) = \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{2} \{m(\lambda)+1\} w(t-\lambda) r(\lambda) d\lambda + n(t) \quad (2) \\ \text{積分器の出力は, } & \bar{m}(t) = \int_{-\infty}^t m(\lambda) d\lambda = \int_0^{\infty} m(t-\sigma) d\sigma \quad (M \text{ 系列の積分}) \quad (3) \end{cases}$$

よって、まず、 $\phi_{\bar{m}m}(\mu) = \overline{\int_0^{\infty} m(t-\sigma) d\sigma \int_0^{\infty} m(t+\mu) d\sigma} = \int_0^{\infty} \phi_{mm}(\mu+\sigma) d\sigma$  (Fig. 2 (a) と (a')) (③より) (の関係)

また、 $m(t)$ と $w(t)$ が統計的に独立ならば、両者に関する平均演算は分離できて、

$$\begin{aligned} \phi_{\bar{m}y^2}(\tau) &\triangleq \overline{\bar{m}(t-\tau) y^2(t)} \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} d\lambda_1 \int_{-\infty}^{\infty} d\lambda_2 \int_0^{\infty} d\sigma \frac{1}{4} \{m(t-\lambda_1)+1\} \{m(t-\lambda_2)+1\} m(t-\tau-\sigma) w(t-\lambda_1) w(t-\lambda_2) r(\lambda_1) r(\lambda_2) \\ &\quad + \int_{-\infty}^{\infty} d\lambda \int_0^{\infty} d\sigma \{m(t-\lambda)+1\} m(t-\tau-\sigma) w(t-\lambda) n(t) r(\lambda) + \int_0^{\infty} d\sigma \overline{m(t-\tau-\sigma) n(t)} \quad (5) \end{aligned}$$

となる。 $\overline{m(t)} = \overline{w(t)} = 0$ により、上式が2, 3項は0となり、また、 $w(t)$ の白色性： $w(t-\lambda_1)w(t-\lambda_2) = N \cdot \delta(\lambda_1-\lambda_2)$  ( $N$ は $w(t)$ のバワ)を用いれば、(但し、 $\delta(t)$ : Diracのδ関数)

$$\begin{aligned} \phi_{\bar{m}y^2}(\tau) &= \int_{-\infty}^{\infty} d\lambda \int_0^{\infty} d\sigma \frac{N}{4} r^2(\lambda) \overline{\{m(t-\lambda)+1\}^2 m(t-\tau-\sigma)} \quad (\because \overline{m(t)} = \pm 1, \overline{m^2(t)} = 1, \overline{m(t)} = 0 \text{ を用いると、次式へ}) \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} d\lambda \int_0^{\infty} d\sigma \frac{N}{2} \phi_{\bar{m}m}(\tau-\lambda+\sigma) r^2(\lambda) = \frac{N}{2} \int_{-\infty}^{\infty} r^2(\lambda) \phi_{\bar{m}m}(\tau-\lambda) d\lambda \triangleq \frac{N}{2} \phi_{\bar{m}m}(\tau) * r^2(\tau) \quad (6) \end{aligned}$$

この結果は、バワ伝送系 $r^2(\tau)$ を、 $\phi_{\bar{m}m}(\tau)$ で励振(たときの出力(の $\frac{N}{2}$ )が、 $\phi_{\bar{m}y^2}(\tau)$ になっていて、しかも雑音 $n(t)$ の影響は受けなことを示す。 $\phi_{\bar{m}m}(\tau)$  (Fig. 2 (a))の形は、ほぼ階段状で、残響時間の定義における、連続励振後の遮断と見なせるから、 $\phi_{\bar{m}y^2}(\tau)$ は、残響減衰曲線に一致する。別の表現をすれば、Schroederの方法で、Fig. 3のような窓の短音を用いたことに等価である。これをlog scaleに変換すれば、勾配から残響時間が計算される。

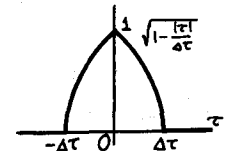


Fig. 3. Equivalent Window.

5 実験結果例 雑音存在下での一例をFig. 4に示す。詳しい実験と、他の方法との比較検討は、橋秀樹氏がしておられるので、御参照願いたい。

6 結語 音響計測に広範な応用を持つ<sup>2)</sup>M系列変調相関法を、少し変形することにより、雑音存在下でも可能な、残響時間測定の方法を得た。なお、この研究は、東大宇宙研においてなされたものである。

- 文献 1) M.R. Schroeder: JASA. vol. 37 (1965)  
 2) 青島 樹蔵: M系列の相関を用いた音響測定 日音学誌 24巻4号(68)  
 3) 橋 秀樹 氏 研: M系列変調を用いた長距離音響計測 特性の測定 日音学誌 昭和48年10号  
 4) 橋 秀樹 氏: M系列変調相関法による残響時間測定 一実験的検討一 本論文集

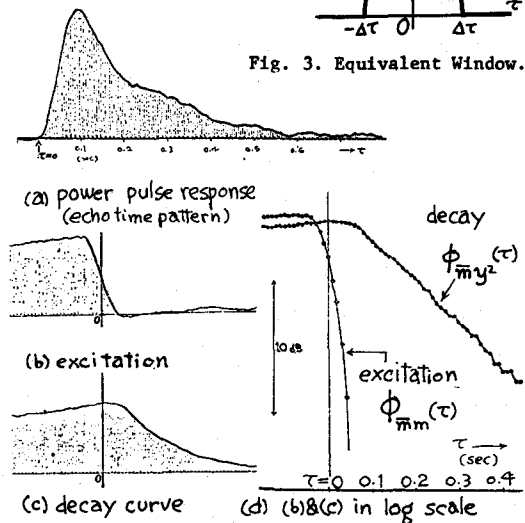


Fig. 4. Results of Experiment.